人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

長野県木曽町

○学校名

木曽町立開田中学校

○学校のＵＲＬ

http://www.kisoji.com/edu/kaida-jhs/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各１学級、【特別支援学級】0 学級、【合計】3 学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】３２人（平成２６年１２月１日現在）
（内訳：１年生 10 名、２年生７名、３年生 15 名）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成 25 年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校
平成 26 年度人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
「御嶽を仰ぎ　自ら高める　輝け　豊かに　たくましく」
【人権教育に関する目標(目指す生徒の姿)】
「相手の気持ちを想像しながら、自分の考えを伝えそれによって生じることに折り合いをつけ、建設的に発展させることができる生徒」

○人権教育に係る取組一口メモ

地域学習や体験学習を通した豊かな心の育成の推進

○人権教育にかかる取組の全体概要

【研究テーマ】
「自己肯定感を高め、他者受容する力を伸ばすための指導の在り方」
【研究の重点】
○互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動。
○授業や活動の終わりに振り返りとシェアリングの位置付け。
○様々な人の生き方や考え方に触れる地域学習や体験学習。
○相手を思いやった自己表現をするためのスキルの向上。

３．特色ある実践事例の内容

１　研究内容

○互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動。

日常の学習活動の中では、互いの考えを発表し合うことで、自分にはなかった発想を知ったり、自分の考えと重ね合わせることで考えを深めたりすることができる。友達に自分の考えを認めてもらったり、共感し合って学習を進めたりすることは、自己肯定感や他者を受容する力も高めていくことができる。そこで、「互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動」を意図的に取り入れることをどの教科・領域の学習においても大事にして取り組んできている。

○授業や活動の終わりの振り返りとシェアリング

授業や活動の終わりに「振り返り＝言語化」とそれを発表し合う「シェアリング（分かち合い）＝共有化」を行うことで、自己開示ができ、相手を大切にする「傾聴スキル」も養われる。友達の「シェアリング」から自分が大事にされていることや自分では気づかなかった自分の良さに気づいた子供たちは、更に相手を大事にしようと思えるようになる。日々の授業の終末で、授業と人権教育の視点を与えた自己評価・他者評価を書き、それを発表し合うことは自己肯定感の高まりにつながると考えられる。そこで、授業や体験学習などの後振り返りとシェアリングを大事に考えていっている。

○様々な人々の生き方や考え方に触れる地域学習や体験学習

他者受容する力を伸ばすためには、共感性を高める必要がある。そのためにはいろいろな大人や異年齢の子供たちとふれあい、いろいろな人間の考え方を取り入れていくことが必要である。そこでの活動を成し遂げることにより成功感や達成感を得ることもできる。このように地域学習は、他者との関わりの中で共感性や自己肯定感を育むことができると考えられる。地域の理解を深めるためにも、地域に中に出て行き地域の方とともに学習を積む体験を大事にしていきたいとと考えている。

○相手を思いやった自己表現をするためにスキルの向上

日々の授業や生活の中では、「聞き方」「話し方」「相手の発言を受けての自己主張の仕方」などの具体的な行動方法（コミュニケーションスキル）を指導している。また「相手の気持ちや周りの状況を考えずに、自分の気持ちをぶつけてしまいがちな生徒」や「Ｑ－Ｕで学校生活満足群に入っていない生徒」が少なからず存在している実態から、人間関係づくりの授業や構成的グループエンカウンターを行い「傾聴スキル」「リフレーミング」などのスキルを身につけ、互いを認め合う雰囲気を作る必要性があると考えている。心が開け活発に子供たちの主張がなされ、それが「互いに折り合いをつける」段階になることを目指し、ソーシャルスキル学習や構成的グループエンカウンターに取り組んでいきたいと考えている。

２　研究の全体構想図

【生徒の実態】

○男女を問わず仲がよく、協力して活動ができる。

○悪いことをさりげなく指摘し合ったり、集団としての規律を守ったりしようとする。

○地域学習や地域活動に積極的で地域の良さや交流の楽しさに気づきつつある。

●友に対してやや固定した見方や人間関係があり、互いの考えを受け入れることができないことがある。

●自分の考えに自信を持って語ったり、相手のことを想像しながら自己主張したりすることが苦手である。

●地域でどんな仕事や取り組みが必要なのか関心はあるものの、具体的に考えることができていない。

⇩

【研究テーマ】

「自己肯定感を高め、他者受容する力を伸ばすための指導の在り方」

・他者受容する力は、自己肯定感がないとできない。

・「ありのままの自分でいいのだ」と思えないと、他の人を受け入れられない。

⇩

【研究の重点】

○互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動。

○授業や活動の終わりに振り返りとシェアリングの位置付け。

○様々な人々の生き方や考え方に触れる地域学習や体験学習。

○相手を思いやった自己表現をするためのスキルの向上。

⇩

【目指す生徒の姿】

相手の気持ちを想像しながら、自分の考えを伝えそれによって生じることに折り合いをつけ、建設的に発展させることができる生徒。

４．実施する際に生じた課題及びその解決策

保存会の人達がたくさん来てくださっているときは、「全員で話し合いをするのではなく、対人スキルを向上させるためにも、小さなグループに分かれて話をした方がよいのではないか」ということが課題として出された。今後は、少しずつそのような形で話をしたり、練習をしたりして、触れ合う時間を増やし、対人スキルを高めながら、伝統芸能を身につけていきたい。

５．実践事例の実績、実施による効果

１　互いの考え方を知り、認め、高め合う学習活動に関する事例〈2年生　学活〉

（１）　題材名　「みんなが楽しい登山にするために」（6月２６日）

（２）　授業のねらい

御嶽登山の学習や準備を始めた生徒たちが、登山計画に対する自分のアイデアをだし合う場面で、実際の行程の中にそれらを組入れるかを話し合い、検討することを通して、自分の考えを積極的に伝えたり、友の考えをできるだけ取り入れようと共感的に受け止めたり折り合いをつけたりしようとすることができる。

（３）　授業における人権教育の視点

○自分の考えを恥ずかしがらずに進んで伝えることができる。

○友達から出された難題に対しても、実現できるような方法や工夫を考え、肯定的に考え、折り合いをつけていくことができる。

（４）　実践から得られた効果

〈授業での生徒の姿と考察〉

授業の一場面

Ｐ生：「御嶽の頂上でココアを飲んだり、アイスを作ったりしよう」
Ｂ生：「持っていく荷物が増えて重くない？」
Ｃ生：「卵割れたらいけないよね」
Ｄ生：「割れたら最悪だ」
Ｃ生：「作るのにどのくらい時間がかかるのかな？」
Ｂ生：「そうだよ。そこが問題だよ」
Ｅ生：「アイスの材料には雪があるよ」
Ｆ生：「ココアを飲むと元気がでるね」

ふだんなら、「何を言っているの」とＰ生の意見はクラスの仲間から流されてしまいがちなものが、この提案は多くの仲間に肯定的に受けとめられた。この時間、Ｐ生の自己肯定感は高まり、被侵害感も減少したと考えられる。

〈この取り組み後に見られるようになった２年生の姿〉

○9月　「数学」：Ｐ生は、今までは自分のやり方にこだわり、人の説明を聞こうとする姿勢があまりなかったが、「Ａさんの説明を聞いてとても簡単なやり方があることがわかった」と振り返り、クラス全体に発表した。Ｑ生は、「みんなの説明を聞いていろいろなやり方があることがわかった」と振り返った。

○10月「音楽」：Ｋ生は、合唱練習を頑張る。Ｎ生は音楽会の反省に「クラスのみんなと協力できた」と書く（※　1年時の11月頃は協調性が課題であった）。

２　様々な人々の生き方や考え方に触れた地域学習や体験学習の事例

〈2年生　総合的な学習の時間〉

（１）題材名「姫獅子舞に挑戦しよう」（11月6日）

（２）授業のねらい

開田高原の姫獅子舞の学習に対する願いを持った生徒達が、実際に姫獅子舞を鑑賞したり、地域の伝統を伝承する方たち（開田高原民舞保存会＝ゆるり会）の想いを聞いたりすることを通して、地域の伝統を継承する人たちの想いの大切さを感じとることができる。

（３）授業における人権教育の視点

○自分や友達の取組の良さに気付き、進んでそれを伝えることができる。

○地域の方たちの想いや願いを知ることで、意欲的に取り組んでいこうとする力を育むことができる。

○地域の人々の様々な想いや考え方を受け入れながら、自分たちの取組を振り返ることができる。

（４）指導上の留意点

○自信を持って考えを伝えられるよう、昨年度までの振り返りや今年度の取組に対する意識付けを前時までに十分に行い、考えをワークシートにまとめておくようにする。

○ゆるり会の代表者のお話に焦点を絞り、開田高原の伝統に対する想いをビデオに撮影して編集してポイントを絞って伝える。

○ゆるり会の方たちと交流したことや姫獅子舞の内容だけでなく、自分や友達の気持ちや様子に視点が向くよう、話合いの中で出た大事な発言や姿を黒板に残していくようにする。

〈授業での生徒の姿と考察〉

授業後の学習カードに次のような記述が見られた。

> ゆるり会の方々の気持ちを知ることができたので、これからその気持ちを考えながら踊ったり、触れ合ったりしたい。姫獅子舞のストーリーで意外な事がたくさんあったので、練習するときは意味をしっかり理解してやりたい。
>
> みんな手が挙がっていたから良かった。

> ゆるり会のこと、姫獅子舞のことをいろいろクラスで聞いて、今まで以上に頑張ってつなげていこうと思った。クラスのみんながしっかり発表することができたのでよかった。これから２年生とゆるり会の方たちで全力で練習する。

> ゆるり会の方たちのお話を聞いて、目標は「若い人に受け継ぐことだ」と言っていたので、僕たちも協力できるように楽しく踊りたいと思いました。

姫獅子舞やゆるり会のことがよくわかった。実際に見てすごく迫力があり難しそうだけどがんばりたい。

姫獅子舞のこと、ゆるり会のこと、開田の伝統のことなのに驚くことがたくさんあった。

姫獅子舞がビデオで見たときよりもかなり迫力があったので、自分たちも、見てる人に「迫力があるね」と言われるように練習していきたい。

実際に姫獅子舞を鑑賞したり、ゆるり会の人の想いをビデオで視聴したり、直接質問したりしたことは、地域の方たちの想いを感じとることにつながったと思われる。また、地域の方たちの想いや願いを知ることで、意欲的に取り組んでいこうとする力を育むことができたと思われるし、授業のおける自分たちの取組（挙手や発言の仕方）の良さにも気付いている。

〈取組後に見られるようになった生徒の姿〉

教職員の観察から、学習に対して集中して前向きに取り組んだり、質問を積極的に出したり姿が、多く見られるようになったと感じている。生徒会引き継ぎを前にして教室訪問でも、緊張しながらも堂々と自分の考えを発表する姿には自信や力強さが感じられる。3月の郷土芸能発表会に向けて学級全体の団結力を高め、学校全体をこれからは、自分たちで引っ張って行こうとする雰囲気がクラスにできつつあると考える。

６．実践事例についての評価

○「互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動」や「授業や活動の終わりに振り返りとシェアリングの位置付け」に重点を置くことは、人権教育のみならずそれが学力向上にもつながると考えられる。日常的に、互いの授業を見合ったり、意見を交換したりして、研究を深めていきたい。

○「様々な人々の生き方や考え方に触れる地域学習や体験学習」を行うことで、生徒の自己肯定感や共感性ややる気が育てられるということが明らかになってきたので、こうした活動をこれからも継続的に行っていきたい。

○「相手を思いやった自己表現をするためのスキルの向上」のために毎年講師を招いて職員研修を行っている。積極的に研修の成果を授業に取り入れ、生徒の人権感覚を高めていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

木曽町立開田中学校
人権教育を推進するに当たっては、一人一人の個性や能力を生かし、学級の一員としての存在感が味わえるようにすることが重要である。 本事例には、「互いの考えを知り、認め、高め合う学習活動」や「様々な人々の生き方や考え方に触れる地域学習や体験学習」、「相手を思いやった自己表現をするためスキルの向上」など、多角的な視から展開された実践が紹介されている。 一人一人の子供が自信をもって生活できるようにするためには、一人一人の教職員が、深い子供理解に基づいたきめ細かな指導を行い、子供たちの間に、周囲の者からの支えや励ましが得られるような人間関係を構築することが必要である。各学校が、本事例で紹介された総合的な学習の時間や特別活動の実践を、それぞれの実態や地域の特色に応じて活用し、人権教育をより効果的に推進することが期待される。